

社寺建築 及臺灣檜材の安價提供
設計監督

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候
(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不充分なる檜材は于割狂ひ等の缺陷多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地

(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社 寺 工 務 所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町

社 寺 工 務 所 鶴 見 支 所

福岡市外堅箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福 岡 支 所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所 大 阪 支 所

(電話西三二二四番)

臺灣檜材の六大大特徴

- 一、耐久防腐
- 二、蟻害絶無
- 三、香氣清楚
- 四、木質堅緻
- 五、理整松木
- 六、木高輝色

統一價定

一冊	半冊	一冊
金壹圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢
送料共	送料共	送料共
金貳圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢

統一廣告料

表紙一頁	表紙一頁	表紙一頁	表紙一頁
金貳圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢
拾五圓	拾五圓	拾五圓	拾五圓
拾五圓	拾五圓	拾五圓	拾五圓

大正十五年 八月三十日印刷納本
大正十五年 九月一日發行 (第三百七十八號)

不許複製

編輯所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯所 名古屋市中區田代町字城山七十七番地
發行所 名古屋市中區田代町字城山七十七番地
印刷所 名古屋市中區千種町字五反田五二番地

目 次

聖訓摘要……………大僧正…本多日生

法華修業の安心……………本多日生

秋窓異學瑣談……………古田昂生

理想の文化と佛教……………本多日生

日蓮聖人(童話讀本)……………長谷川義一

各地通信報導……………編輯局

第三十三十一十年月號

統

一

教

第九號出づ

本誌執筆家

その堂々の容
各方の名筆

本多 日生
後藤 新平
床次 竹二郎
永井 米藏
岩野 直英
高島 平三郎
志賀 重昂
佐藤 鐵太郎

毎月一日 十一日発行 一部金十銭

東京府荏原郡品川町南品川四二二

發行所 教發行所

(振替東京一〇九四〇番)

蓄音機 ドーコレ

大僧正本多日生師吹込

- 一、宗教信仰の必要
- 一、佛教信仰の歸結
- 一、佛教の卓越せる所以
- 一、聖語

取次所

統閣

本多日生猊下著小冊子

(現在各品のみで千賣切れ絶版になつたものは)
注文さるゝと餘計な手数で困ります)

自我 講義

修法勸行の心得

一切の勝利は人格にあり

宗教の五綱

教育勸語と思想問題

統閣編輯局

多数購讀の節は特別割引す御照合下さい

聖訓摘要

(第六)

大僧正 本多 日生

眞問釋迦佛御供養逐狀

これは富木殿が釋迦佛を造立せられたことに就いてお書きになつて居るので、特に取出して申す程のこととありませぬが、唯だこの釋迦佛造立の事といふのが澤山御遺文の中にあります、四條金吾釋迦佛供養、日眼女釋迦佛供養といふやうに一人や二人ではない。そこで今日も本佛論の中には、お釋迦様を忘れて本尊の形式を論ずる人が非常に多くなつて居る。書方が「どうだ」といふやうなことはかり言つて、弘安三年がどうちやとか、佐渡始願がどうちやとか言つて御曼茶羅の書方ばかりやかましくいふが、何處が一番大事だか肝腎な所が判らない、詳しく書いてあるとか少し書いてあるとかいふことで喧嘩として居るけれども、それは第二の議論である、第一は釋迦牟尼佛に對する意識信念が非常に大事である。それ故に富木殿に於ても釋迦佛供養鈔があり、四條金吾、日眼女等に就いても釋迦佛供養鈔といふものがある譯である。日蓮聖人が佐渡在嶋中も、やはり釋尊一體を塚原三味堂に安置して拜んでお居になつた。之れを整うた方に行くには四菩薩を造立するとか、或は曼茶羅式にお書きになるとかいふことになるけれども、根本の信仰といふものは釋尊の大事なることを忘れてはいけぬ。宗教は人格が第一である、如何に法華經ありと雖も釋迦牟尼佛の本佛であることを忘れたならば、法華經は空虚なものになつてしまふのである、

それは屢々申述べたことであるから繰返さないが、この『真間釋迦佛供養鈔』に就いて特にその點を申し置きます。

日蓮聖人の當時に出來たお寺を見ても、大抵釋迦中心である、池上の本門寺にも今でも釋迦堂といふ物がある、祖師堂は後に拵へた物である、中山の法華經寺にお出でになつても釋迦堂である、あゝいふ日蓮聖人當時から在るお寺は皆釋迦中心のものである。それは昨年小笠原毅道君が歴史的にその事を論證し、次には大阪の嶋村日聖師がこの事を論證して居りましたが、この歴史上の研究は洵に尊いことと考へます。私は必しも本尊は曼荼羅式に限らぬといふ事を主張して居る者である、御曼荼羅も無論結構であるが、併し日本中の寺々に擴まつて居る本尊はやはり木像の本尊が多い、近來は曼荼羅式になつて居る所もあるけれども、先づ數千箇寺に渡つて居る寺を御覽になつたならば御曼荼羅を掛けて居る寺は少ない、皆釋迦、多寶、四菩薩等の木像が祀つてある、それが皆間違ひぢやといふに就いては餘程強い根據がなければならぬ。私はそれは間違ひではないと思ふ、何處までも本尊は三寶式といふことが主であつて、澤山書いたといふことは主ではない、十界の諸尊を書き列ねるといふことが本尊の主ではなくして、本門常住の三寶を大事に考へなければならぬ、それ故に本門の三寶たる佛様は誰であるか、法は何であるか、僧は誰であるかといふことを注意するのが大事である、澤山書いてあるといふことは眞言の曼荼羅式であつて、萬有神的思想になつて行き居る、さういふ事が有難いと思つて居る間はどうも未だ本當に頭腦が出來て居らぬ。日蓮聖人の勸請文といふものを見ても。——書き現はす方に就いては互略いろいろ舐れて居るが、勸請文として唱ふる方は何時も變らない、その變らない所はどうかと言へば「開述顯本法華經中常住の三寶護法

列位の諸天善神」といふことである、であるから佛法僧の三寶と諸天善神を併せて日蓮聖人は勸請して居られる、諸天善神は即ち守護の意味になつて居る、信仰の中心は佛法僧の三寶に歸依するといふのが佛教信仰の中心である。さうすれば佛様といふ事が一番に置かれなければならぬ譯である、御曼荼羅の書方はかりやかましく言つて「本門常住の三寶とは何ぞ」と言はれた時分に、その佛といふことに行詰るやうなことではいくまい。日蓮宗各派が舐れて居つても、必ず御回向には「南無久遠實成大恩教主釋迦牟尼佛」といふことを言はぬ者はない、その點に於て區々たる學說よりは、全國に亘つて居る寺々及び各教團の勸請文がやはり三寶式になつて居ることを考へて、佛様を大事にしなければならぬと思ふ、又その意味に於て佛教各宗の統一を主張しなければ、佛法僧の三寶を忘れて論を立て、も通じない議論になるであらうと思ふ。一切經の上に亘つて佛教徒の信條といふものは、阿含の始めから三寶歸依を主張せられ、涅槃經の終りに至る迄一貫して釋迦如來がお説きになつた事である。それ故に日本に來ても聖德太子が佛法を信せよといふ言葉は「篤く三寶を敬へ」といふことである、佛教を信ずるとは三寶を敬ふことである。泥棒でさへも捕縛まつたら「南無三寶」といふぢやないか、三寶が判らなくなつてしまつては泥棒にも及ばないやうになつてしまふ、だから關西あたりではお佛壇の事を三寶様といふ。佛法といふものは三寶式に依るものである、近來の曼荼羅の議論が悪くはないけれども、餘りに其處ばかりやかましく言ふと、書方の議論ばかりになつてしまつて、此方の方に書いてあるのが宜いとか悪いとか言つて居るけれども、それは第二の議論である。「觀心本尊鈔」が日蓮聖人の本尊に就いての義解であるけれども、それでも曼荼羅式の事ばかり論じてあるのではない、直ぐ釋尊中心の議論にやはり歸つて居る、それは觀心本尊鈔を通じて大觀

して見れば能く判かることである、その點を注意しなければならぬ。

大豆御書

これも極く短かい文章であります、洵に大事な事が書いてある。

一滴の水を大海になげぬれば三災にも失せず、一華を五淨によせぬれば劫火にもしばまず、一豆を法華經になげぬれば法界みな運なり。(遺文錄)

これは眞に善い言葉だと思ふ、一滴の水を大海に入れたならば永遠にその水は無くならない、一滴の水を離して置いたならば直ぐ蒸發して亡くなつてしまふけれども、それを大海に加へれば大海の水の永遠に存する限り俱共存して行く、大きな物と力を協せれば僅かの力でも減びずに行くものである。華はどんなに美しくとも暫くすれば萎んでしまふものであるけれども、五淨天といふ天の果報の所に置けば容易にその華が萎まない。さういふ譯で今豆を御供養になつたが、これを豆として考へれば豆だけの物で大した價値の物でない、食へばそれ限り亡くなつてしまふ、けれどもそれを法華經に御供養なさつたといふことになると、この豆が變じて蓮の華となつて全法界に咲くものである。豆が蓮の華になつてバラ／＼落るナンと言つたら、手品使ひみたやうに思ふだらうけれども、その意味は、吾々の詰らぬ考へでも法華經の正義に賛成をして、この法を通じて世の中に力を盡さうとか、大きな道の爲に自分の僅かな力を加へても、その力がその教と共に引つて行くのであるから、廣大な功德といふものが成立つ。丁度日本人が勤王愛國の事に参加すれば、僅かな力でも國のあらん限り團體を擁護し、國運の爲に盡したといふことに依つてその名

は何處までも遣つて行く、若も自分一人の事に盡せば自分が死ぬと共に亡くなつてしまふ、自分が如何に努力して給金を餘計貰つても、油揚げを食つて死ぬといふことなれば、その死んだ時一生の努力といふものは皆消えてしまふけれども、この力を皇室なり國家なりに捧げれば、日本の國家のあらん限りその力は何處までも減びずに残つて行くが如く、モウ一つ他の方面で考へれば、法華經の御爲め或は本佛の御爲に力を盡したならば、この宇宙のあらん限り非常な功德となつて法界に滿るといふことである、それが豆を法華經に捧げたならば法界みな運なりといふ意味である。これは大豆一石とありますから大分の豆であるけれども、假令一石にした所が一石の豆を降らした所で逆も一町四方にも及ぶ譯でない、けれどもそれが法華經に捧げた功德となつて行く時には、法界に運となつて弘まるやうな力がある。これが宗教の面白い意味である、すべて功德といふものはさういふ意味になつて行くものだらうと思ふ、一滴の雪が大海の水に合すれば、三災といふ世の中が燒ける時にもその水は無くならんやうなものであるから、法華經の爲に盡す功德といふものは洵に有難いものであるといふ事を書かれた。

金吾殿御返事

これは四條金吾に贈られたお手紙であります、この中に、

流死の二罪の内は一定と存せしが。(遺文錄)

と書かれた、流罪か死罪かの中ごつちかになるものぢやと自分は思つたが、併ながら法華經の爲には流罪死罪になつても構はぬといふ決心覺悟をして盡したものであるといふ事をお書きになり、續いて、

人身すてにうけぬ邪師又まぬがれぬ、法華經のゆゑに流罪に及びぬ、今死罪に行れぬこそ本意ならず候らへ、あわれさる事の出来し候らへかしとこそはげみ候て、方方に強言をかきて擧をき候なり、すでに年五十に及びぬ餘命いくばくならず、いたづらに曠野にすてん身を同くは一乗法華のかたになげ、雪山童子、藥王菩薩の跡をおひ、仙豫有得の名を後代に留めて、法華涅槃經に説き入れられまゐらせんと願ふところなり。南無妙法蓮華經。(同上)

洵に日蓮聖人の決心が能く現はれて居ると思ふ、人間に生れたことさへ有難いと思つて居るのに、それが悪い師匠に就けば間違つた教に流れて行くのであるが、幸に正しい師匠に就いて正しい教に進むことが出来、且つ正しい法華經の御爲に流罪にまでなつた日蓮、法の爲に一分の御用を勤めたと思へばこんな嬉しいことはない、同じ事ならば命までも法華經に捧げたいと思つて居るのに、未だ生き長らへて居るのは本意ない事である、どうぞこの命は法華經に捧げたいと思つて居る。「今死罪に行はれぬこそ本意ならず候へ」で、どうか命まで御用に立つることが出来れば宜いが、と思つて居るので、それには手緩いことではさう行くまいと思つたから、十一通の書を書いて方々に強い事を言つた譯である。寧ろそれに依つて日蓮が死罪に行はれることを望んで居る譯である。モウ日蓮も年五十になつて、是れから幾つ迄生きるといふでもない、空しく死んでほかに甲斐も無い事であるから、同じ事ならば法華經の御用に立つて雪山童子や藥王菩薩、或は仙豫國王などの名が後代に留つて、法華經や涅槃經の中に説いてあるやうに、日本國に日蓮と言へる沙門あり、國の爲め法の爲め身を捨て、盡したといふ事を、後の佛様の御經の中に説いて貰ひたいと思つて居るのであるといふ事を書いて居る。洵に日蓮聖人の御決心が鞏固に現はれて居ると思

ひます。

善無畏三藏鈔

これは大分長い御書で、佛様の事に關して餘程能く書かれて居りますから、數箇所御紹介したいと思ひますが、一々お話しするよりもその文章を茲に列擧して置かうと思ひます。

或は一代聖教の始末淺深等を擧へざる故に専ら經文を以て責め申す時、各々宗々の元祖の邪義扶け難き故に陳る方を失ひ。或は疑つて云く、論師人師定めて經論に證文ありぬらん、我が智及ばざれば扶けがたし。或は疑つて云く、我師は上古の賢者なり、今我等は末代の愚人なりなんと思ふ故に、有徳高人をかたらひ以て怨のみなすなり。然りと雖も予自佗の偏黨をなげすて論師人師の料簡を闡て、専ら經文によるに法華經は勝れて第一におはすと心得て侍る也。法華經に勝れておはする御經ありと申す人出来候はゞ思食べし。此は相似の經文を見たがへて申す歟、又人の私に我と經文をつくりて事を佛説によせて候歟、智慧おろかなる者辨へずして佛説と號するなんごと思食すべし。(六三七)

警へば天に日月にすぎたる星有なんご申せば眼無き者はさもやなんご思はんが如し。我師は上古の賢哲、汝は末代の愚人なんご申す事をば愚なる者はさもやと思ふ也。此の不審は今に始まりたるにあらす。(六三八)

日蓮八宗を勤へたるに法相宗、華嚴宗、三論宗等は權經に依つて或は實經に同じ或は實經を下せり、是れ論師人師より誤りぬと見えぬ。俱舍、成實は子細ある上律宗なんごは小乘最下の宗なり。人師よ

り論師、權大乘より實大乘經なれば、眞言宗大日經等は未だ華嚴經等にも及ばず、何に況んや涅槃法華經等に及ぶべしや。而るに善無畏三藏は華嚴法華大日經等の勝劣を判する時理同事勝の釋を作りしより已來、或は傲りをなして法華經は華嚴經にも劣りなん、何に況んや眞言經に及ぶべしや。或は云く眞言のなき事は法華經に諍ふべからず。或は云く天台宗の祖師多く眞言宗を勝ると云ひ、世間の思も眞言宗勝れたるなんめりと思へり。日蓮此の事を計るに人多く迷ふ事なれば委細にかんがへたる也、相餘處に注せり見るべし。又志あらん人々は存生の時習ひ傳ふべし、人の多くおもふにはおそるべからず、又時節の久近にも依るべからず、専ら經文と道理とに依るべし。(遺文錄)

一を以て萬を知れ、眞言等の諸宗の誤りをだに留めん事手ににぎりておぼゆる也。況んや當世の高僧眞言師等は其の智牛馬にもおとり螢火の光にもしかず、只死せるもの、手に弓箭をゆひつけ、ねごとするものに物をとふが如し。手に印を結び口に眞言は誦すれども其の心中には義理を辨へる事なし、結句慢心は山の如く高く欲心は海よりも深く、是れは皆自ら經論の勝劣に迷ふより事起り、祖師の誤りを正さざるに依る也。所詮智者は八萬法藏をも習ふべし十二部經をも學すべし、末代濁惡世の愚人は念佛等の難行易行等をば拋て一向に法華經の題目を南無妙法蓮華經と唱へ給ふべし、日輪東方の空に出させ給へば南浮の空皆明かなり、大光を備へ給へる故也。螢火は未だ國土を照さず、寶珠は懷中に持ぬれば萬物皆ふらさすと云ふ事なし、瓦石は財をふらさず、念佛等は法華經の題目に對すれば瓦石と寶珠と螢火と日光との如し。(遺文錄)

又我師釋迦如來は一代聖教乃至八萬法藏の説者也、此の娑婆無佛の世を最先に出させ給て一切衆生の

眼目を開き給ふ御佛也。東西十方の諸佛菩薩も皆此の佛の教へなるべし、譬へば皇帝已前は人父を知らずして畜生の如し、堯王已前は四季を辨へず牛馬も癡かなるに同じかりき、佛世に出させ給はざりしには比丘比丘尼の二衆もなく、只男女二人にて候き、今比丘比丘尼の眞言師等大日如來を御本尊と定めて釋迦如來を下し、念佛者等が阿彌陀佛を一向に持て釋迦如來を拋てたるも教主釋尊の比丘比丘尼也。元祖が誤りを傳へ來るなるべし、此の釋迦如來は三の故ましまして佗佛にかはらせ給ひて、娑婆世界の一切衆生の有縁の佛となり給ふ、一には此の娑婆世界の一切衆生の世尊にておはします。阿彌陀佛は此の國の大王にはあらず、釋迦佛は譬へば我國の主上の如し、先づ此の國の大王を敬つて後に佗國の王をば敬ふべし。天照太神、正八幡宮等は我國の本主なり、進化の後ち神と顯れさせ給ふ。此の神にそむく人此の國の主となるべからず、されば天照太神をば鏡にうつし奉りて内侍所と號す。八幡大菩薩に勅使あつて物申しあはさせ給ひき、大覺世尊は我等が尊主なり、先づ御本尊と定むべし。二には釋迦如來は娑婆世界の一切衆生の父母也、先づ我が父母を孝し後に佗人の父母には及ぼすべし。例せば周の武王は父の形を木像に造つて車に載せて戰の大將と定めて天威を蒙り、殷の紂王をうつ、舜王は父の眼の盲たるをなげきて涙をながし、手をもて拭ひしかば本のごとく眼あきにけり、此の佛も又是くの如く我等衆生の眼をば開佛知見とは聞き給ひしか、いまだ佗佛を開き給はず。三には此の佛は娑婆世界の一切衆生の本師也、此の佛は寶劫第九人壽百歳の時中天竺淨飯大土の御子、十九にして出家し三十にして成道し、五十餘年が間一代聖教を説き八十にして御入滅。舍利を留めて一切衆生を正像末に教ひ給ふ、阿彌陀如來、藥師佛、大日等は佗土の佛にして此の世界の世尊にてはましまさ

す。(遺文録
六四一)

委しく尋ねあきらめば唯我一人能爲救護と申して釋迦如來の御手を離るべからず。(遺文録
六四四)

いろ／＼釋尊の有難い事を述べられて、本當に佛教をやつたならば「唯だ我れ一人能く救護を爲す」とお説きになつたやうに、一切の者は釋迦如來の手に依つて救はれるのである、如何なる者と雖も釋迦如來の手を離れては救はれるものでないといふ事を明かにしなければ、佛教を學んだとは言へないといふ事を書かれ、續いて佛滅後に於ては優填大王を始として皆釋迦牟尼佛を渴仰して、佛教といふものは盛になつて來たものである、阿育大王にしても皆釋尊の事を追慕せられたものであるといふ事を詳しくお書きになつた。それからその後いろ／＼の宗旨が出て法華經を輕んじ、隨つて釋迦牟尼佛を捨てるやうになつたといふ事をお書きになつて居る、その文章を茲に擧げて置きます。

されば優填大王の赤梅檀いまだ佗佛をばさざませ給はず、千塔王の畫像も釋迦如來也。而るを諸大乘經による人々我が所依の經々を諸經に勝れたりと思ふ故に、教主釋尊をば次さまにし給ふ。一切の眞言師は大日經は諸經に勝れたりと思ふ故に、此の經に證とする大日如來を我等が有緣の佛と思ひ、念佛者等は觀經等を信する故に阿彌陀佛を娑婆有緣の佛と思ふ、當世はことに善導、法然等が邪義を正義と思ひて淨土の三部經を指南とする故に、十造る寺は八九は阿彌陀佛を本尊とす、在家出家一家十家百家千家にいたるまで持佛堂の佛は阿彌陀也。其の外木畫の像一家に千佛萬佛まします大旨は阿彌陀佛也。而るに當世の智者とおぼしき人々是を見てわざはひとは思はずして、我意に相叶ふ故に只稱美讚歎の心のみあり、只一向惡人にして因果の道理をも辨へず、一佛をも持たざる者は還つて失な

きへんもありぬべし。我等が父母世尊は主師親の三德を備へて、一切の佛に擯出せられたる我等を唯我一人能爲救護とはげませ給ふ、其の恩大海よりも深し、其の恩大地よりも厚し、其の恩虚空よりも廣し。二つの眼をぬいて佛前に空の量の數備ふとも、身の皮を剥て百千萬天井にはるとも、涙を闕伽の水として千萬億劫佛前に花を備ふとも、身の肉血を無量劫佛前に山の如く積み大海の如く湛ふとも、此の佛の一分の御恩を報じ盡しがたし。而るを當世の僻見の學者等、設ひ八萬法藏を極め十二部經を暗んじ、大小の戒品を堅く持ち給ふ智者なりとも、此の道理に背かば惡道を免るべからずと思召すべし。(遺文録
六四四)

一つははは大日經は法華經に勝れたりとする誘法の失也、二つには大日如來は釋尊の分身也、而るを大日如來は教主釋尊に勝れたりと思ひし僻見也、此の誘法の罪は無量劫の間千二百餘尊の法を行すとも惡道を免るべからず。(遺文録
六四四)

要するにこの「善無畏三藏鈔」は餘種仔細に研究する必要があるもので、別に講述しても宜い程の文章であります、茲には大要を御紹介するに止めて置きます。

眞言七重勝劣

これは大日經は法華經よりは七段劣るお經であるといふ事を論證されたのであります、斯ういふ事は既に譯も心得て居る事でありますから、詳しく申す必要もなからうと思ひます。

眞言天台勝劣事

これは眞言宗と天台法華宗の優劣をお書きになつたのでありますが、特にその中に大日經は佛教の中で
は方等部のお經である、それから佛教の法則として、釋迦如來の出られる所に他の佛が出て來て佛教の信
仰を棄るといふことは無い譯であるといふことを書かれて居る。

大小四教の旨を説くが故に方等部と云はすんば何れの部とか云はん、又一代五時を離れて外に佛法有
りと云ふべからず、若し有らば二佛並出の失あらん、又其の法を釋迦統領の國土にきたして弘むべ
からず。(道文錄 六六六)

洵に明晰な文なので、佛教に於ては「一佛化境に二尊の號無し」と申して、一人の佛様が教化せられる
所に二つの尊號、即ち二人の佛が出て優劣を争ふことはないといふのが佛教の定則である。それ故にこの
娑婆世界は釋迦如來の出現して佛教をお聞きになる世界であつて、事實釋迦如來が出て佛教をお聞きにな
つたのである、その他に一人も佛は出られない。若し今の釋迦教が滅びてしまつて、佛教といふものが亡
くなれば、又新しい佛が出て來るであらませうけれども、釋迦の教が残つて居る間は釋迦の教で行か
ればならぬ、だから大日とか彌陀とか言つてもそれは釋尊の教の一部にさういふ言葉を使つたので、本は
釋迦如來の事である。大日如來などと言つた所で大日釋迦同體といふことを昔から論じてありますが、そ
の通りのことである。又釋迦彌陀同體といふ議論もあるが、これもその通りである、さうしてごちらが中
心になるかといへば釋迦といふ名前がモウはつきりして居る、この世界に出られた佛の名に違ひないので
あるから、名分と申して、名などはごつちでも宜いといふやうな譯であるけれども、これが混亂したなら
ば思想といふものは紊れてしまふものである。吾々は阿彌陀様でも大日如來でも、それがこの世に出て佛

教をお説きになつたならば譯でも宜い、釋迦といふ名に拘泥する譯はないけれども、釋迦牟尼如來といふ
佛が佛教を開かれた佛に事實上違ひがないのであるから、それを變へることは出來ない譯である、即ち一
切の佛の有難い意味合は釋迦の名に於いて之れを認めて行きさへすれば宜い譯である、それを紊すといふ
ことは洵に間違つたことになる。日本で言へば天照太神を始めにして伊勢の大廟に祀つたのであるから、
それに他の名前を持つて來てくつ付けることはいけくない、始めに天照太神とつけずに他の名前がついて居
つたならばそれでも宜いけれども、ちやんと天照太神といふ名がついて居る所に變つた名前を持つて來て、
例へば天理王尊とか良の金神とかいふものを以つて天照太神よりごつちの神の方がえらいといふやうなこ
とを言つて、それを冒すといふことはいけくないことになる。名などはごつちでも宜いといふけれども、名前
を正さんければ思想といふものは紊れて行くものであるから、釋迦教の中に於ては釋迦の名を立てなけれ
ばならぬ、基督教の中に於ては基督の名前がごつちでも宜いといふ譯にはいかん、飽く迄も基督の名に於て
その教といふものは正して行くものである。ごつちでその位の事が日本人に何れか私に不思議に思ふ
位である。

又之れを根本の研究に戻して見た所で、大日とか彌陀とかいふやうな名前は、皆釋迦の徳から附けた名
だといふことも華嚴經にも説いてあるし、今日の知識から研究すれば全くさういふ意味になる譯である。
「大日」と言つても日の光といふ言葉であるから、釋迦の徳が人の心の闇を照すことを尊んで、日の光よ
りも勝れる大日と言つたのである。「彌陀」と言つた所が壽命が長いといふことであるが、釋迦は本佛とす
れば一番壽命が長い譯である、壽命品に依つて久遠實成の本佛とすれば、阿彌陀如來の無量壽ごころでは

ない、真に無始無終の絶對の壽命を有つて居るものである。だから釋迦が本當の阿彌陀である、出來損ひの小さい阿彌陀ではなくして大阿彌陀ぢや、誤魔化しの大日でなくして本當の大日が釋迦だといふことになつてしまふ、何もそんな名前を變へてマゴつくことはない。藥師如來なら藥師如來と言つた所が、釋迦如來が一切經の教を説いて、人の心の病を癒すといふことで、他の醫者はこの世界に出て來ないのであるから、上手だか下手だか判らん、本當の名醫は釋迦如來である、吾々の精神の病を一切經を説いて癒して呉れた眞の藥師である。であるからそんな名前は皆釋尊の德に就いて附いた名前である、それを唯だ名前だけ切離して、結構な一切經を説いて呉れた偉大な釋迦を忘れて、藥師如來が有難いかお地藏様が有難いかいふやうなことを言つて、この實際の吾々の思人釋尊を忘れることはいかんといふことを日蓮聖人が言はれたのである。私はこの思想には誰も反對することは出來ないと思ふ、日本に於ては天照太神を本にしなければならぬが如くに、佛教に於ては釋迦を本としなければならぬ。物は本を動かすと面倒になる、日本の國に於て天照太神を動かしてはいくまい、佛教に於て釋迦を動かしてはやはり駄目だといふことを説明された點が、私は非常に卓見であると信するのであります。

秋元殿御返事

この中には五節供に關することが擧つて居る、五節供といふのは桃の節供とか菖蒲の節供とかいふ、普通の日本の風俗に關する事でありませんが、それに關して非常に尊い事があると思ふ。

五節供の時も唯だ南無妙法蓮華經と唱へて悉地成就せしめ給へ。(遺文錄)

これはどういふ意味に於て尊いかと言へば、人間が家庭の娯樂、或はその國の風俗上から來る愉快の感じ、例へば桃の節供に白酒を飲んで悦んで居るとか、或は五月の節供に柏餅を食べて悦んで居るといふやうな風俗習慣の中に、そこに清き信仰を興へて、さうして五節供の時にも南無妙法蓮華經といふ、即ち釋尊をしてお餅を食べて居る時にも南無妙法蓮華經といふやうに、これが人間のさういふ風俗習慣および善良なる生活といふものと一致しなければいかん。これがお雛様の前で「ナンマイダー」と言つたんでさうも縁起が悪いといふことになる、所が日蓮聖人のやうに五節供の時も南無妙法蓮華經……少しもをかしくない、五月の節供に柏餅を食うてお茶を飲みながらも南無妙法蓮華經……これが調和して行くものでなければならぬ。さうして「悉地成就せしめ給へ」といふのは、一切の願望が實際の生活と離れずして、そこに實際の信仰が輝いて行くやうにせよといふことである、「女房と酒うち飲みて南無妙法蓮華經」といふ所もあるけれども、それよりもこの方が尙ほ善いと思ふ、櫻を見に行つて「今日は面白かつた」と言つて歸つて來るその時にも南無妙法蓮華經がちやんと調和する。私は最近京濱電車の中で深く感ずることがある、夕方歸ると能く電車で一緒に居る、相當な位置の人のやうで、會社員か何かと思ふが、その人が電車の中で南無妙法蓮華經と唱へる、誰か唱へても宜い譯ですが非常にそれが愉快に感ずる、丁度一日の業務を終つて勝利のやうな意氣込で電車の中に入つて來て「南無妙法蓮華經」と言ふ、その言ひ方が非常に好い工合に出て來る、何處か大森か池上かあの邊に住んで居る法華宗の人らしいが、感心な人だと思つて居る、私はあゝいふ所が宜いと思ふ。桃の節供、菖蒲の節供に一日家内中が楽しんで居る時にも南無妙法蓮華經、必しも佛壇を開けてこれからお勤行と言はずして、柏餅を口に持つて行つた時に南無妙法蓮華經と

いふ、これが宜いと思ふ。一切の實際人生の活動の中に法華經の信仰の流れ込んで調節された意味が茲に在る、さういふ譯でこの句は簡單であるけれども大いに應用し發揮しなければならぬ日蓮主義の大事な教訓であると思ひます。これは五節供に限らぬ結婚の時でも宜い、三々九度の盃が済んだ所で南無妙法蓮華經……、これが「ナンマイダー」では一寸工合が悪からう、工合が悪いだけ念佛といふものが人間の實生活に適しないことを現はして居るのである。尤も彼等から言つたら工合が悪くないといふだらうけれども、さういふ特別な説明を加へて工合が悪くないといふのではないかん、素人が考へても調和するやうな宗教が私は善いと思ふ。學校の卒業式で免狀を貰つた時でも「有難うございます南無妙法蓮華經」……これなら宜いけれども、免狀を貰つて「ナンマイダー」……どうも工合が悪い。この聖訓は洵に大切であると思ふ、どうか盛んに之れを應用發揮せられんことを希望します。

壽量品得意鈔

これは「開目鈔」の中の一節が抜いてあるので、大事な事が書いてありますけれども、恐らく開目鈔以後に出来たものであらうと思ふ。四月十四日の日附があつて、開目鈔よりズット前にこの遺文録では出て居るけれども、これを編者が此處に入れたので、斯ういふ大事な開目鈔と相似た文章が開目鈔以前に別にあつたといふことは信ぜられない、眞に開目鈔の大切な所だけが抜いてあるので、結構な御文章であります、これは開目鈔以後にその中の一節をお書きになつたものと私は思ひます。

四條金吾女房御書

就中夫婦共に法華の持者なり。法華經流布あるべき種をつぐ所の玉の子出で生れん、目出度覺え候ぞ。
(遺文録六七二)

これは四條金吾の奥さんが懐妊された時に贈られた御文章で、四條金吾夫婦の中に玉のやうな子供が生れて、それが法華經の種を傳へて、あなた方兩人の信仰を受けついで、益々廣宣流布に力を盡す後繼者が出来るであらうと言つてお喜びになつて居る。それから進んで

明かなる事日月にすぎんや、淨き事蓮華にまさるべきや、法華經は日月と蓮華となり、故に妙法蓮華經と名く、日蓮また日月と蓮華との如くなり。信心の水すまば利生の月必ず應を垂れ守護し給ふべし。
(遺文録六七二)

これは日蓮聖人の名前を説明されて居るので、「明かなる事日月に過ぎんや、淨き事蓮華にまさるべしや」といふ、この智慧の明かなる事と徳の淨き事とに依つて日蓮といふ名をお附けになつたのである、日は明かである蓮は淨徳である、明智と淨徳とを兼ねて日蓮とお名乗りになつた、それを見るにこの御文章が洵に明かであります。古來いろ／＼聖人の御名を解するに就いて説もありまされども、御自身で此處に斯の如く仰せられた所に御名の意味が能く判つて居る。随つて日蓮主義者は智慧の方法に於てもやはり明智を尊んで、併せて淨徳を尊んで行かなければならぬ、唯だ信心をするといふ宗旨ではない、結局は信心一つであるけれども、その教義を正し、その思想を撰んで行く上に就いては、明智日月の如く明かなるもの

を以つて日蓮主義として進んで行かなければならぬ。唯だ盲目的にお有難主義で行くのでは、日蓮の「日」の字が消えてしまふ、日の字を「盲」の字に換へなければならぬ、日蓮でなくして「盲蓮」になつてしまふ。日蓮と言つた以上は何處までも教義上の事、思想上の事に就いては明かなる方針を立て、進んで行くことが、永遠に日蓮主義の方針となつて行かなければならぬ。

月満御前御書

これは四條金吾殿に贈られた子供が生れた時の祝ひ言葉であります。

若童生れさせ給ひし由承り候、目出たく覺え候、殊に今日は八日にて候、彼と云ひ此と云ひ所願潮の指すが如く、春の野に華の開けるが如し。(遺文錄)

今度子供がお生れになつたさうであるが、丁度今日はお釋迦様のお生れになつた八日の日である、彼といひ此といひ實に目出度いことで、恰も春の野に華が咲いたやうな悦びであると言はれた、この中にも日蓮主義が輝いて居る。マア譯でも子供が生れたら目出たいといふやうな譯だけれども、日蓮主義は殊に潮の指すが如く、春の野に華の開けるが如しと言つて、人生の發達を祝福して行く、今迄のやうにお寺は法事と葬式ちやといふやうなことになる、子供が生れたのはお宮に行くんだ、死んだ時の死人はお寺の本堂に擔ぎ込む」といふけれども、さうではない。日蓮主義は子供の生れた所から斯の如く敬意を表せられて居るのであるから、今後日蓮主義者は結婚でも子供が生れた時でも、すべて日蓮主義の信仰の上に於てやつて行かなければならぬと思ふ。

十章 鈔

これは既に全文を講述しましたから略します。

四條金吾殿御書

これには孟蘭盆會に關する事が説いてありますが、進んで斯ういふ事を書かれて居る。

日蓮此の業障をけしはて、未來は靈山淨土に參るべしと思へば、種々の大難雨のごとくふり雲のごとくにわき候へども、法華經の御故なれば苦をも苦とも思はず。(遺文錄)

日蓮聖人がやはり靈山淨土の成佛の歡喜を以つての故に、法難に耐えて苦しい事を苦しいとも思はずしてやつたと仰せられて居る。又

今月十二日の妙法聖靈は法華經の行者なり、日蓮が檀那なり、いかでか餓鬼道に墮ち給ふべきや。定めて釋迦、多寶佛、十方の諸佛の御寶前にまします、是こそ四條金吾殿の母よ母よと同心に頭をなで悦びほめ給ふらめ、あはれいみじき子を我は持ちたりと釋迦佛とかたらせ給ふらん。(遺文錄)

あなたのお母さんが今月十二日にお亡くなりになつた、それは法華經の行者でもあり、日蓮の檀那でもあつたから、無論餓鬼道にはお出でにならない、定めし釋迦佛等の御寶前にお出でになつた時に、釋迦如来が諸佛に御紹介になつて、「これが四條金吾の母である、四條金吾は法華經の行者日蓮が上行菩薩の再身として龍の口で迫害に遭つた時に、頭斬るべくは御供仕らんと言つて腹を切つてお伴をしやうとした、

その法華行者の手本である四條金吾の母である」と言はれて、諸佛に紹介をせられたならば、お母さんは靈山會上にまで自分の子の爲に名譽を博して、「あゝ、良い子を持つたものぢや」とお喜びになつて居るだらうといふことを、四條金吾に仰せ遣はしになつた、洵に有難い御文章であります。諸君も子を持たば四條金吾のやうな子を持ちたいといふ事をお考へになつて、どうぞ法華信者の中から良い人間を澤山拵へて戴きたいものであります。

行敏御返事

これは行敏といふ淨土宗の坊さんが日蓮聖人に贈つた書面が出て居つて、それに對して日蓮聖人が御返事をお書きになつた。

行敏訴狀御會通

これは行敏の讒訴狀に對する辯明が書いてあるのでありますが、これも今迄度々申し述べたことで、いろ／＼嘘の讒言があるのに對して日蓮聖人が辯明せられたのである。

一昨日御書

これが愈々龍の口當日の日に相成つて來るのでありますが、この御書は全文何れも結構な文章であります。中に就て最も大事な所を御紹介すれば、

方今世悉く關東に歸し、人皆土風を貴ぶ、就中日蓮生を此の土に得たり、豈に吾國を思はざらんや。

(蓮文錄六八七)

當時は鎌倉の勢力が強い爲に、日本人が皆鎌倉北條の御機嫌を取るやうな事になつて、京都の朝廷を忘れるやうになつて居るが、これは怪しからん事である。日蓮は日本に生れた以上は日本の國體たる皇室の尊嚴を第一に考へ、蒙古の襲來に備へて、内には勤王の大義を唱へ、外には日本の國家の擁護を唱へ、北條の惡逆と蒙古の襲來とに備ふるやうにしなければならぬといふのが日蓮の主張である。それ故に鎌倉方とは何れ意見は合はんといふことを書いて強く申し送られた爲に、この書面に依つて愈々龍の口の法難といふ事が起り、續いて佐渡ヶ嶋に御流罪といふ事になるのであります。

大僧正 本多日生師著 本尊論

目次 一、緒言 二、宗教と本尊 三、諸種の本尊觀 四、本尊と眞理 五、本尊と倫理 六、本尊と政治 七、佛敎の本尊觀 八、佛敎の三寶觀 九、佛身觀の要旨 一〇、滅後信仰の概観 一一、佛敎本尊の各方面の考案 一二、法華經に顯はれたる本尊 一三、蓮文に顯はれたる本尊 一四、本尊の勸諭文 一五、本尊勸諭の實例 一六、蓮文の會通 一七、異論の解決 一八、結論

定價 布製一部 金七十錢 送料金四錢

(紙製は品切れ)

發行所

立正結社

名古屋東區田代町常樂寺内

賣捌所

統一編輯局

編者名古屋一〇八一番

法華修行の安心 (下)

五、安心と信順

大僧正 本 多 日 生

その最初に數ふべきは先づ「安心」の「信順」の側である。安心を組成して居る心の坐はり場所には、無論その真中に「信順恭敬の心」といつて、この精神を捧げて、さうして有り難いと感激して居る所の心があるに相違ない。併しそれだけが安心ではない。その信順の側に就ては「開目鈔」の中に「法華經了因の子」といふことを日蓮聖人は仰せられて居る。これは涅槃經の譬へから來たのであるが、或る女の人が子供を産んだ、その子供がやかましいといふので家主から店立を食つて逐ひ出された。そこでその子を伴れて方々流浪して歩いて困難をする、一人者であれば嫁にも貰つて呉れるし、稼ぎにも行けるけれども小さな子供を伴れて居るが爲に非常に困難をする。その場合に母親は「この子供さへなければ宜いのに」と言つて、その子を恨んでこれを捨てるといへば決して捨てない。さう斯うする中に河を渡つてどうしても向ふへ行かなければならぬ事が出來た、その途中で船が引つ繰返つて子供と共に水の中に陥つた、その時に子供を手離さへすれば自分だけは助かつたのだけれども、この可愛い子供を殺して自分だけ助かることは出來ないといふので、子供と諸共にその母親が溺れて死んだ。これは唯だ子供が可愛いといふだけで死んだのは大したことはないやうに思はれるけれども、その慈愛の精神が一貫して居つたが爲に、

彼女は直ぐに梵天に生れることが出來たといふことが涅槃經に説いてあるのを日蓮聖人が引かれて、これと同じことである。法華の信者はこの信仰を有つて居ることの爲に、世間で如何なる苦勞をしようとも、母親がその子供を捨てざるが如くに、佛の了因の子といふものを懐いて、これと共に没してもといふ信念を中心懐くならば、彼女はその子を愛しただけで梵天に生れたのである。こちらは法華經の信仰を懐いて居るに依つて、成佛は疑ひなしといふことを説かれた。その「法華了因の子」といふことを了解しなければならぬのである。

この「了因」といふことに就ては大變難かしい意味が出て來るけれども「性因」「了因」「縁因」といふのは自分が有つて居る佛様の性質を言ふのである。「了因」といふのはその佛性を聞いて呉れる直接の力を言ふのである。「縁因」とはそれを助け成す所のいろ／＼の善根功德を言ふのである。恰もこれを婦人が子供を産むことに譬へたならば、子の種となるべきものを婦人が持つて居る、即ち卵巣といふものがある、それは「性因」である。「さうして夫といふものがある、それが「了因」である。さうして「縁因」といふのは御馳走を食べて榮養を良くしたり、着物を着て風邪を引かぬやうにしたりするといふことが縁因である。その中で子を産むといふことに就ては、了因が一番大事なことになるのである、如何に婦人の体が壯健であつても、如何に御馳走を食べても、温泉へ行つても、夫が無い限りには子供が出來ない。そこでこの「了因の子」といふことを「開目鈔」では言はれるのである、自分の有つて居る佛性なり、自分の善心といふものも尊いものであるけれども、人間が良い考を有ち佛性を啓發して來るに就ては、いろ／＼な

世間にある善根功德といふものが要るけれども、その中心にこの「了因の子」といふものがなければいけない。その中心の了因といふものが本佛釋迦如來の感應から出て来て、さうして佛の子といふものが生れて出るといふのである。

このことは國民道徳に就て考へても分る。大和民族の性向が如何に立派なもので、先祖代々日本人の性質傾向が立派であつて、優秀なる民族であつた、さうして又いろ／＼な文化を聞いて、世の中にいろ／＼な善い事があつて澤山の教もある、立派な歴史もあると言つても、そこに皇室の尊嚴がなかつたならば、國民性の一番大事な大和民族の國民精神といふもの——忠義の心といふものは生れて來ない。皇室の尊嚴あつて始めて大和魂は生れるのである。皇室を敬ふの心を除つて後の、日本人は元氣だとか、日本人は勇氣があるとかなんとかいつても、日本に皇室が無く、日本人に皇室を敬ふの心が無ければ、大和民族の國民精神といふものは無いのである。即ち國民道徳では皇室の存在が一番大事である、洵に申すも恐れ多いことであるけれども、皇室が若し無いことになつたとしたならば、もう大和民族の一番大事な特色といふものはそれと同時に全滅してしまふものである。だからして日本に於ては皇室の儼存、皇室の千代八千代に榮えますといふことが一番大事であるといふことが分るのである。法華修行の安心の中には本佛釋迦如來が吾々に了因の子を御與へ下さるのであるから、吾々が信順する對手の本佛釋迦如來の常住不滅、吾々を愛護してお居でなされるといふことを心頭より忘れた時には、國民が皇室を忘れたと同じものだといふことを日蓮聖人は仰せられた。

その點が今日日蓮門下に於ても不透明になつて居るだらう。丁度今日の輕佻浮薄なる所の國民が皇室の存在を輕いことに考へなし、或はこれを呪ふ者すら生じたといふが如きことであつて、實に恐多いことであるが、日蓮教徒にして本佛の關係、本佛の慈愛といふものに感奮感激せざるやうな者が一人あつても、これは法華經に對し日蓮聖人に對して申譯ないことだと考へなければならぬ。さもなければ法華修行の安心信順といふことの中堅がないのである。「文字が有り難い」……そんなことは附け加へた議論である。「妙法の妙の字が有り難い」……そんな字は何處にでもある、妙といふ字は何も法華經で始まつたのではない、支那にある字を借りたものであるから、何處にも妙といふ字は使はれて居る。又法華以前の諸經の中にも、妙法といふ言葉が澤山現はれて居る。又さういふ諸法實相のやうな意味合も、始めて法華經で説いたのではない、多少の違ひはあるけれども、首楞嚴經でも般若經でも、何處にでも諸法の實相の大体は説かれて居る。これが必ずしも法華經の特色ではない。法華の特色は、諸法實相から出て二乗作佛を説き、女人成佛を説く、この人身觀上に於て十界皆成佛道を説いたる所に存する。宇宙の理法としての妙法といふやうな、普通の人が操つて居るやうなことは大乘經の通説である。學問が足らぬから宜い加減なことを言つて、「それは爾前の圓ぢや」「法華の圓ぢや」といつてゴチャ／＼言つて居るけれども、要するにさういふ事に於て多くの學者の言つて居ることは何れも不徹底極まるものである。爾前の圓と法華の圓の相違といふものは、今の人身觀と佛身觀に依つて違ひがあるといふことを明かにしたのが日蓮聖人の「開目鈔」である。爾前と法華と相對するに二つの相違あり、二乗作佛、久遠實成なるべし、若しもこの實相の妙理がどうちや斯うちやといふやうなことを言ふならば、それは日月を除いて虚空の明暗を争ふやうなものである。二乗作佛と久遠實成の法門を除けて置いて、諸法實相の議論に於て法華と他のお經と違ひがあ

るとか無いとかいふのは、お日様を取除けてしまつて夜と晝とどちが明るいといふ議論をすると同じことぢやとまで言はれて居る。その位に嘲けられて居るのにその然りが戻るナンといふことは、餘程二重にも三重にも薄馬鹿でなければ出来ない藝當である。

であるから法華修行の安心に就ては、即ち信順の中堅が了因の子として本佛釋迦如來を熱切に渴仰することより外ないのである。

それから随つてその信心のきめ方が現はれて来る。「今身より佛身に至るまで能く持ち奉る」といふ言葉に出て来るのである。これは「聖愚問答鈔」にもあり、「本門戒體鈔」にもある、又大抵の日蓮門下は何處でも言うて居ることであるが、併しその「持ち奉る」といふことが唯だ南無妙法蓮華經といふ唱へ言葉だけになつて、内容が空虚になつてしまふ、そこが大禁物である。「能く持つ」は宜いけれども、南無妙法蓮華經の言葉だけ持つといつて信仰意識といふものが消えてしまふ、さういふことは甚だ宜くないことである。

何故かといふと題目の内容は非常に多含的のものである。一切の妙法ならざるはなしといふ位のものであるから、そこで先づ少なくとも題目の内容に就ては二つ位のことは考へなければいかぬ。即ちその題目が「萬有神の」の題目になつて居るのと、「統一神の」の題目になつて居るのと、それを區別しなければならぬ。さもなければ宗教の學問の法則に少しも合はない。妙法蓮華經の中に何でもあるといふは萬有神神である。萬有神といふのは何でも神様である。佛様であるといふ思想であつて、宗教學の上に於ては最もこれを卑むのである。眞言では一切諸法皆な毘盧遮那如來ならざるなしといふことを言ふのであつて、

大日如來というても人格の佛がある譯ではない、六大といつて地水火風空識みな佛である。であるからここに轉つて居る下駄の割れたのでも、此處にカンテラの火が燃えて居るのでも、これ皆な毘盧遮那如來である、斯ういふことを言つて居る。一應聽くと知識としては非常に高いやうであるけれども、下駄の割れたのを拜めといつても拜むことは出来ない。「これが毘盧遮那如來だ」或程」と言つて見ても、半分わかつて半分わからぬやうな所に人間の智能といふものは引つ掛つて居るのである。それを「分りました」と弘法大師が言うたけれども、それは嘘である、弘法大師も下駄の割れたのを前に置いて、これが毘盧遮那遍照如來であると言つて拜んでは居まい、それが何處までも一貫して下駄の破片が大日如來に見え出したら、これは精神病院へ送らなければならぬといふことに相成るのである。譯の分らぬことをつまらぬ坊主がこね廻したのである。人間には所謂情意といふものがあつて、下駄の割れたのを見れば下駄の割れたのだと思ふ、これを床の間に置いたり、佛壇の上に置いたならば氣持が悪くて辛抱の出来るものではない。又左様なものを頭の上に戴くことが出来るか出来ないかやつて見たら宜い、草鞋の腐つたのや下駄の割れたのを頭の上に載せて見るが宜い、そんな氣持がするか。そんな愚にも附かぬやうなことを以て眞言宗なごといふものを聞いた、その精粕をねぶつて、日蓮教徒が「題目の中には何でもある、何でもある」といつて、唯「何でもある」といふことが一番らしいことのやうに思つて、法華開會といへば何でもそこに入れる、狐でも狸でも何でも構はず取込んで居る。この迷信の状態といふものを一刻も早く改善しなければ廣宣流布の妨げをなすといふことは、火を睹るより明かなことである。何故これを改善しないか、日蓮門下の名を冒す者の中に於て、さういふ淫祠迷信に等しいやうなものがあるならば、これは實に教の爲にも、

祖先に對しても、國民思想の本分に顧みても慚愧に堪へないといふ、何故一遍の反省の心を有たぬか。數へて御覽なさい。つまらないものが一杯ある。それは皆な萬有神論的のものである。多くの信者はだら／＼として「御題目とは何だ」と問はれても答辯も出来ない。「何」といふことはない、何でもあるものぢや」といふやうな思想を有つて居る。法華經は元來そういふ思想を否定したものである。萬有諸法が皆な實相であるといふことは理論的には言ふけれども、これを直に宗教の對象として拜めと言つたものではない。その信仰の對象を明かにして、釋迦如來を中心にして、一切の佛でも菩薩でも皆なそこに集合して釋迦中心の渴仰状態といふものを示して居る。「寶塔品」に明かなるが如く、十方の諸佛來集すると雖も皆な釋尊の分身として悉く釋尊の前に頭を下げ、多寶如來來ると雖も釋迦如來を贊歎し、上行等の諸菩薩出現すると雖も釋迦如來を讚美し、觀音來るも妙音來るも皆悉く釋迦如來を尊敬し渴仰する意味を示して、釋尊を中心にして一切の渴仰の中心を明かにして居るものである。下駄の齒なごを拜めといふことが何處にあるか。「方便品」に於ても唯諸法の實相を説きつ放しにしたものではない、その諸法の實相より出でて一切衆生に皆な佛知見あり、これを開かんとして釋迦如來は大慈の心に促されて居る。然るに一切衆生は徒らに苦を以て苦を捨てんとし、血を以て血を洗はんとして少しも目覺めない、如何にも慙れな者であるといふ慈悲の光の上からして、進んで「譬諭品」となつて、即ち三車大車の譬を説き、遂に釋迦如來の「今此三界」等の主師親の三徳を明かにし、「信解品」に於て弟子達がそれを了解して、長者とその長者の子の迷うた譬を説いて、父は何處までも迷うた子供を棄てずして、遂にその乞食になつて居つたものを救ひ上げ給うたものであるといふ大慈大悲に感激して居る。迹門だからと言つてそんな迂遠なことだけ説いたも

のではない。それから進んで「樂草論品」に至れば、天より雨が降つて枯れなるとする草木が助かるといふことが説いてある、これ皆な釋迦如來を中心にして説けないことである。その次の「化城論品」にした所がやはり一人の導師があつてさうして大勢の人を導いて連れて行くといふのである。その一人の導師とは釋迦牟尼佛である。

斯様にして題目の中心といふものは何處までも統一神的事であつて、幾ら神様が有り佛様があつても、それは皆本佛釋迦如來に於て統一されるものぢやといふ、この統一中心の釋尊を敬慕渴仰する精神に於て南無妙法蓮華經と唱へなければならぬ。釋尊に向はざる所の題目といふものは全然日蓮主義に於ては許されないものである。大体「今身より佛身に至るまで」といふことは誰に申上げて居るのであるか、題目の字に對して言ひ居るのではない。これは授戒の作法としては、その戒を受ける者と、それから戒を授ける者との間に大和上があつて、その人が「汝今身より佛身に至るまでこのことを持つか」と仰せられる、それに対して御答へを申上げて「今身より佛身に至るまで持ち奉ります」といふ言上をして居るのである。その言上する對手方といふものは本佛釋迦牟尼佛である、釋迦牟尼佛を意識せずして「今身より佛身に至るまで」といふことを誰に對して言ふのであるか。そんな不透明なことで、人格を中心とせない、字が中心である、理窟が中心であるといふやうな宗教は、今後悉く勢力を失墜するものである。

それ故に今身より佛身に至るまでといふことを申上げる時には先づ本佛釋迦如來の感應を明かにしなればならぬのである。例へば先づ日本の國民精神を痛切に表はして居る者は軍人である、一般國民も軍人のやうにあるべきだけれども、今日の國民はフラ／＼して居る、軍人は大和民族の性質を一番能く表はし

て居る。その軍人の心得として、今進軍しようといふ時分に、彼が何を自分の精神の中堅に置いて居るか、それは「大君の爲め」といふその一つである。その君の爲めといふことに於て、天皇陛下萬歳の聲に促されて大和民族は進み行くが如くに、法華教徒といふものは本佛禪迦如來の「毎自」の悲願に刺戟せられて、そこに奮闘を續けるものである。その中心を曖昧にするといふことは斷乎として出来ない、如何なる學者が言うてもそんな者は皆な馬鹿である。

それからその信順の中には、無論自分の成佛といふことも考へなければならぬ。宗教の信仰は現在の事ばかりではない、「今身より佛身に至るまで」といふ「佛身」といふことを考へなければいかぬ。それから、つてこの世の中のあらゆる善根功德を積むのである。「晝回向佛道」といつて如何なる善い事をして、最後の決心は佛道に向せられなければならないのである。する仕事は實際生活の上の道德行爲であつても、その功德は唯名前を竹帛に垂れるとか、一般人の言ふやうな名譽心といふものではない。斯様にして、なす所の有爲小善の善根も、皆な我が佛身を成就する時の縁因の功德となつて行くやうにといふ、その最後の完成を理想して居るのがこれが本當の安心である。國民道德として言ふたならば、自分の爲したるいろ／＼の事、商賈であらうが何であらうが、その内の善い事は皆な纏まつてそれが皇室の御爲め、同胞臣民の爲め、往いては自分が日本人としての本領に背かなかつたといふことに行くのである。人間に大切なのは目的を明かにし、理想を明かにして、日々とする仕事は千差萬別、木の葉の風に吹かれて飛ぶが如くに見えても、その中に連絡統一が失はれて居ないといふことが人格の價値であります。そこで進んで安心と慰藉といふことを考へなければならぬ。

六、安心と慰藉

安心の中には直ぐに慰めを受けるといふことが潜んで居るのである。前に申したのは信順であるが、信順の當初直に非常な慰めが現はれて来る。それは日蓮聖人の御言葉に依れば、「佛の御魂の入り代はらせ給はねば唱へ難き題目なり、」今この信仰に自分が生きたといふことは、自分の心の中に佛様が御入り下さつた程のことであつて、我が心と言ふけれどもその儘佛の心である。さうして今この信念から導かれてする仕事は、如來の仕事を手傳うて居る譯である。如來の心に住し、如來の事を行ふ、人間としてこれ程光榮なることはないといふ所の喜びがそこに燃えて来るのである。もう少しこの宗教といふものを眞面目に考へないと、その有り難さといふものが徹底をして来ない。それから又日蓮聖人の

立ち渡る身のうき雲も晴れぬべし妙の御法の鷲の山風

といふ御歌の如くに、信念の光に導かれ、ば人生の憂き艱難は雲の如く次から次と起つて来やうとも、東風一陣、この憂き艱難の雲は残る所もなくこれを吹き拂うて、妙の御法の信念の光に依つて慰めを受けるといふのが、これが安心の慰藉の方面である。

尙ほ日々の生活に就ては「悲しきにつけても樂しきにつけても南無妙法蓮華經」と日蓮聖人の言はれたことは、悲しいから題目を唱へるのではない、悲しき中にも信心があるといふことの喜びに慰められて、表面から考へれば悲しいやうであるけれども、さりながら自分は信念を有する、何もこれ位のことでは悲しむ必要はない。「煩しき事あるも夢になして」と言はれて居る、この意味合を能く考へていろ／＼心配なこ

ともあるけれども、その方の側は夢を見て居るやうなものである、信念の側は夢うつつではない、これが本當の正確なことである。この人生に起る誰が悪口を言うた、彼が斯うしたといふやうなことは、今としては自分が非常に重大視するけれども、過ぎ去つて見れば夢に等しいものであると考へて、信念の心ばかりは億々萬劫變らない眞實であると思へば、そこに喜びがあるといふのである。

さういふ具合に宗教といふものを本當に理解してやつて行かなければ、幾らやつても有り難い意味合といふものは分るものではない。「まあ、もう少しやつて居つて見なさい、何か利いて来るだらう」といつて、薬でも飲んで行き居るやうなことを言つて誤魔化した所が、それは何時まで経つても同じことである。さういふ嘘つばちのことを宗教家が教へて廻るといふことは實に怪しからぬことである。そこは正直に、何も商賣とは違ふのであるから、氣に入らぬければ勝手にせよ、正法はこれ程有り難いものだけれども、汝が罪深くして信することが出来なければ已むを得ないと言つて、堂々と教の爲に終始すればそれで事足るのである。

七、安心と力

いま一つは安心と力といふか、剛健といふか、さういふ側が現はれて来なければならぬ。思められるだけでは餘りに女性的である、男性的は表はれる側に於ては、安心を有する者は如何なる困難とも戦はうといふ大願を通ずる人、即ち法華の行者である。如何なる困難が現はれて来ても少しも挫折することのない所に安心の力があるのである。「勇健の想ひを生じ」といふやうに、勇ましく剛健なる精神を失はぬやうにし

て行くのである。殊に法華經の安心、日蓮聖人の安心といふものは、その剛健の側に特色が發揮されて居る。「獅子王の如き心を持つて者佛と成るべし」と言ひ、或は「唱へて唱へ死に、死せよ」と仰せられて、「法華行者は冬の如し、今は寒くて耐へられぬやうでも程経て必ず春が来るぞといふ、その奮闘の中に勇氣を有つて進んで行く所が法華修行の安心である。最後の最後までこの精神を失はぬやうにしなければならぬ、少し弱つたならば人生といふものは忽ちいろ／＼の困難が押寄せて来るのであるから、戦ひは最後の最後まで剛健でなければならぬが如くに、何處までも剛健を以て押通さなければいかぬ。その前には無論能く物事を見分ける智慧も要るし、優しい感情も要るけれども、前に言ふ如く、一度見定めを附けてそこに安心が極つた以上は、剛健鐵の如く通じて行かなければならぬものである。

八、安心と願行

更にその力から現はれて行くものは願行である。唯だ力があるといふのみで、敵がやつて来た時分に殿き倒すといふだけでは甚だ面白くないのである、自ら進んで伐り開いて行く、所謂創造開發して行く願行といふものがなければならぬ。これはいろ／＼の方面であつて菩薩の行に進んで行くのであるけれども、先づ廣く考へる前に順序好く行けば「報恩の行くといふものに進んで行くのである。報恩の行には前後は無いのであるが、唯これを數へる順序として「父母の恩」「衆生の恩」「國王の恩」「三寶の恩」といふ風になつて居る。これは家庭から言ふから父母の恩、社會から言ふから衆生の恩、國家から言ふから國王の恩、天地から言ふから三寶の恩といふことになるのである、範疇順序が斯うなつて居るからして、そこで一に

は父母の恩、二には衆生の恩、三には國王の恩、四には三寶の恩と昔から言はれたので、必しも優劣前後を言ふ次第ではない。この四恩に報ずる、家庭人としては父母の恩に報ひなければならぬ、社會人としては相互の恩に報ひなければならぬ、國家人としては國恩に報ひなければならぬ、宇宙人としては三寶の恩に報ひなければならぬといふことを熱切に考へて、法華の修行といふことは唯お經を誦んだり題目を唱へたりするだけではない。我がこの安心が願行を導いて、その願行に基いて奮闘して行く所に法華修行といふものはあるのぢやといふことを、寤寐造次にも忘れてはならないのである。

それからもう一つの願行としては、今申したのは恩に對して報恩といふのであるが、一方他に向つて行く時には「慈悲」である。その慈悲の心はこれ亦願行の根柢をなすものであつて、何處にもそのことは説かれて居る。「法華經」とは一切衆生を救ふの心なり」といひ、「如來の室に入り、如來の衣を着、如來の座に坐す」といふことがある、その如來の室に入るといふことは何かと言へば「一切衆生の中の大慈悲心に坐す」と仰せられて、法華修行の根本義といふものは人各々の有する慈悲の心を發揚して行くことである。その慈悲心は向ふ所に依つていろ／＼になるので、慈悲といふのは親が子に對するばかりではない。子が親に對して親切の心が起れば孝養となり、人が國に對して盡すの心を起せば愛國心となる、これ皆な慈悲の發現ならざるものはないのである。けれどもそれが自分より低い方に向つた時、殊更強く現はれて來るからして、先進の人は後進の人を愛し、上の人は下の人を愛し、賢き者は愚かな者を受するといふ風にして、この慈悲といふものが法華修行の要義をなすのである。

さうしてその報恩と慈悲とが中心になつて、そこに行はれて行くものは、法國に對する事柄である。法國と國とを守り立て、行かなければならない。自分が一人報恩慈悲を心得て居つても、法が廢れると他の人々が斯ういふ教化を受けることが出來ない、國が衰へれば左様な教も道も壞はれてしまふのであるから、茲に法を護り國を愛する、所謂「立正安國」といふことを願行として進んで行くのであるといふ風に考へて、往いては廣宣流布の大願に加はるのである。日蓮聖人の大願を御樹になつた通り、内には立正安國、外には廣宣流布の大願に参加して、一分の力を盡さして戴く事、これ程光榮なことはない。末世に生れたる吾々如き者が、大聖釋迦牟尼佛の本懷を留められた法華經、本化上行の再身、日蓮大聖人の御定めになつたる願行の中に加つて一分の力を盡すといふことは、自ら光榮身に餘つたことであるといふことを感激感奮して、常に安心と願行が活き／＼して居るのが法華の修行といふものである。

九、安心と得益

随つてその結果としては得益といふことが現はれて來るのである、即ち御褒美が出る譯である。左様にして安心を極めた結果はごういふ御褒美が現はれて來るかといへば、現在には人格が完成されて來る、立派な人間になる、死しては佛様に成るといふことである。それ以外の事は皆附けたりである、何か物を貰ひたいといふやうなことは乞食根性である。自分自身の人格に光が輝いて來る事が何よりの利益である、さうしてそれば終ひには満點に表はれて來たら、完全無限なる佛にまでなつて行くといふことが、安心の結果として得られるものである。何が一番有り難いといつて、自分自らの人格の光ほど有り難いものはない。人格の光が無くなつてしまつて、着て居る着物が光つて居るとか、ダイヤモンドの指輪が光つて居る

とか、金の眼鏡が光つて居るとか言つても、そんなものは皆な他から借りて居るものである。自分の人格が光つて行くといふことを、宗教的安心に於ては第一番に有り難く考へなければならぬ。であるから日蓮聖人の如きは肉體を粉碎されても、「臭き首を法華經に捧げて金色の如來となるは、砂を以て黄金に代ふるが如し、これ程の喜びを笑へかし」と言はれた。本當の自己が玉成され、その前に於て人格を整へ、最後佛様になつて行くといふことが、法華修行の安心の結果として得られる所のものである。

それは日蓮聖人の御遺訓に依ればその通りになつて居る。經に所謂「現世安穩後生善處」といふことも唯だ形容的の言葉ではない、左様な人格を自ら得た結果は、人生に現はれる事柄は自分の心を煩す力が無くなる。所謂光風霽月、自らの人格が如何なる場合に處してもその事を美化し、淨化し、幸福化して行く力を有つのである。一人野原の中に棄てられても、塚原三昧堂の雪の中に置かれても、喜び身に餘るといふことになるのである。斯うなればモウ何物にも負けつことはない、日蓮聖人の一生の如く、首の座に据えられても「これ程の喜びを笑へかし」と言ひ、雪の中に埋められても「喜び身に餘る」と斯ういふことになれば、最早や人生に於て敗北といふことは無いのである。吾々もそこまで容易に達し難いことであるけれど、さういふ意味を安心として學んで、一步々それに近寄らんことを希望することに於て、宗教といふものは入用なのである。「それは日蓮聖人のやうなえらい人のことであつて、吾々は決してそんなことを考ふべきものではない」といつて、この間の縁を切るといふことは非常な間違つたことである。「日蓮が如くし候へ」と聖人は遺訓せられた、日蓮が弟子檀那は日蓮を師として學べ、日蓮を目標として進めよといふことは理調明白なる次第でありますこと故に、吾々も及ばずと雖も大聖人を手本として學んで進んで行つてさうして、眞の「法華修行の安心」に到達する様に努力しなければならぬと考るのであります。(元)

秋窓異學瑣談

不明庵昂生

逝けるオイケン

獨逸イエーナからの來電は哲學者ルドルフ・オイケン教授の訃を傳へた。俗の哲學者オイケン博士は、一九二五年九月十五日を以つてドイツ・チューリンゲンのエナに於て永眠したのである。

嘗てはエナ大學の誇りとなり、且つ獨逸の誇りとして世界にその名を馳せ、世界及び人生の根本問題の核心を論断して大多數の人々を感化影響する處あつた世界の哲學者オイケンは今やこの世に亡い

佛蘭西のベルグソンと共に獨逸のオイケンの名はわれわれ學究の徒には實に永い馴染であり、われらの尊敬措く與はざる先輩である。今、その訃を知り、感慨禁する能はない。

オイケンは一カントに精通し、プラトオを究め、哲學史家として當代比類なき學究であつた。自然主義に反抗し、實證主義、經驗主義、功利主義の立場に在つて、混亂滅裂した思想界を統一して、動かぬ磐石の上に現代人を立脚せしめや

うと計つたその努力と熱誠とは、大いに吾人をして學ばしめ感せしめる處が多い。

「惑へる現代人を導きうるもの、それは永遠で無限に深い精神生活の他にない」

と喝破して通俗的に自説を各方面の人々に知らしめた。彼の云ふ精神生活は、われらの云ふ信仰生活である。日蓮の流れをくむわれらが、オイケンの言葉に依つて更に信仰心を熾烈に燃焼せしむる處又少くない。

諸條の意味に於てオイケンの死を悼むもの、たゞ僕一人でもあるまい。豈んや、彼の著「宗教哲學」「大思想家の人生觀」近代哲學思

想の根本觀念」乃至「國民生活の根本倫理學」など、われらの思慮を富ましめ、裨益する處多大なりしを思ふ者は、萬里を隔つる彼の地で永眠したとは云へ彼の死を「良師の死」として追慕の情禁せざるを得まい。

社會科學の過程

社會科學研究の論題の内容が問題を起した。僕は、司法官でも、行政官でもなく、又、社會科學者でもないから、その内容の正邪は論ずる資格がないが然し、第三者的觀察をこれに向けると頗る興味がある問題であると思ふ。これを學術的方面から考へると

社會觀察の基調に「傳統と進歩の相關々係」を主唱する、バジオットやタルドの學徒の一派と、一つはマルクスから進展したブハリン、或はエンゲルスの辯證法的史觀の學徒との相對する争闘と見る事が出来る。そして前者は今日の支配階級にある人々が、後者は所謂現代思潮を以つて社會科學を研究してゐる人々が屬してゐる。

面白いことに前者は無科學的に傳統説者であり、後者はそれに科學的に先驅をなしてゐるものである。故にこの兩者は頗る遠反的な立場に在る。因襲の支配力を以つて、傳統を固執し社會の秩序と維持とに努め

やうとする人々と、「自然は辯證法的に發展する」と固執する、社會科學進展主義者たちとの、この喧囂なる論議争闘は、最後にといふより未來に變轉する社會事象が必らず、兩者の提唱のどちらかの一つを立證するものがあるを思ふと、この觀照は實にグレート・スケールを持つ興味でなければならぬ。こゝに僕が興味といふ言葉を使用することは一つの不適な態度かも知れないが、もし、僕がこの不適の態度以外に、出づれば、傳統派か進展派か何れかの一派人にならなければならぬ怖れがあるではないか。僕ははつきり主張がある程の男でもなく、又あ

る考へから出来るだけ逃避的な言辭を弄して第三者的に立つてゐやうと思ふが、が然し僕と心を同じくする人が一人でもあつたら、自分にはよき友として共にこの最終的證明期を待ちたいと思ふ。

南蠻紅毛の探究

最近の讀書界を風靡したものは南蠻紅毛研究の書だつた、新村出教授の「南蠻記」松崎實氏の「鮮血遺書」姉崎政治博士の「切支丹宗門の迫害を潜伏」を始めとして「日本西教史」「日本聖人遺書」など其他邦文雜多の書籍を僕も時あるに任かせて涉獵した。而して南蠻文學だとか、切支丹宗門と南蠻貿易

だとか聖フランシスコ・ザベリヨの日本紀行だとか、踏繪だとか、さう云つたいろ／＼の南蠻知識を僅少だが、自分のものにすることを得たが、就中、パレン殉教の事情を知ることが出来て、自分は多大の感激を受けせずにはゐられなかつた。そして、この日蓮の教を知りそして遵奉する可き目的を持つこの雜誌に、異教の事情を述録するのも、實にパレン殉教の眞剣熱烈のさまに感激し異教徒の持つこの長を、われらが法の爲に盡さんとする意志の刺戟ともなし或は又激勵ともしたい所以からである。

鎮國治下に在つて幾百のパレンンは血を流し骨を焼き、尙光輝と博愛に身をゆだねつゝゼエスに祈りマリアを讃嘆したことか、その教への爲に意志の強烈、眞剣な態度は、たとへ、その遵奉隨喜する處の教旨が淺薄矛盾に充滿してゐても、その「信仰のさま」だけは僕らでも否定出来ない力がある。無智的であるにもせよ、非學說的があるにもせよ、彼の徒のこの信仰の熱熱度は、たゞ笑殺して失ふに餘りに忍びないと思はないか。日蓮が龍の口の法難と云ひ、日親の法難と云ひ、わが教宗の人々も、彼らに劣らぬ法難を受け、殉教の犠牲者も亦尠くなかつた。わが教門の人々の法難を思ふ時、謹

理想の文化と説教

本多親下ラジオ 演稿稿

れか涙なくして考へられやう。そしてそれらの先輩の熱烈信仰のさまは、パレンのそれにも亦劣らなかつたではないか。然し、その眞剣さを今も向日蓮教徒は消滅する處なく持續せられてゐるだらうかとも考へる。

日蓮の法難時の態度と、パレンノ殉教的態度とは一脈相通するの力と光りを發見する。そして、その力と光りとわれらが身に考へた時、われらはパレンの殉教事情を思つても三考味嘆せずにはゐられない。われらの南蠻紅毛の探究は畢竟この力と光りとをわれらが仰望して止まないからである。

社會に密着したる宗教として「理想の文化と宗教」と題してお話したいと思ふ。元來文化の向上發達を期するは人類共同の目的である。文明の進歩を共にするものは最も高い、最も清いことである。宗教や國家といふ立派なもので理想の文化に逆行する場合には、その宗教も國家も呪ふべき事柄になるだらうと思ふ。それ程、理想の文化は最高のものである。

大きな立派な文化を建設する上には、それに向ふ前に、整つた理想を吟味して、徹底的な理想、完全なる考察に依つて備かればならない。文化に關して偏重を戒しめ、調和を保たねばならない。それには、完全な理想を持

つて人格と生活の技能を發揮し、個人々々の修養から積まれた精神的文明に依つて社會の向上を圖るのである。われわれが眞の幸福を味ふには精神的文明が寄與を爲すのである。同情、奉仕、博愛、この觀念を總ての人が持つて、始めて社會は美化される。國家は正義を輝かし破邪の力を示し、社會は精神的、物質的に向上進歩して始めて理想の文化は生れるのである。

佛教は人格の修養を最も主にしたもので各個人がこの佛教の主旨をよく了知し、實行したならば最後は上の理想の文化へ到達すべき機運に向ふのであるから、よく釋尊の教を知つて、第一歩から輝へ向ふやうにして貰ひたい。(九二〇・JOC五局)

コドモノ
ヨミモノ

日蓮

聖人

長谷川義一

安房の國、小湊に、眞名太郎重忠と云ふお方がありました。奥様は、梅菊と申します。この重忠は、大變に忠義なお待てでありましたから、北條時政に雷まれて、この小湊に流し者にされました。

それから、漁士となつて貧しい暮らしをして居りましたが、暇があれば、村の子供等に、本や、字を教へて居りました。

こゝは小湊の海岸、村の人々が集つて賑いであります。それは、海邊に澤山の蓮華が今を盛りと咲き亂れましたのを見て、驚いたのであります。

その上に、眞名の家のお庭には、綺麗な泉が湧き出ました。これを見た、村の人々は、又、嘆息いたしました。多くの村人が、不思議

義に思つてゐるその時に、眞名の家には、玉のやうな男の子が生まれました。

梅菊は、ある時、大國が蓮華に乗つて、自分の腹に這入つた夢を見てから、出来た子でありましたから、善日磨と名前をつけました。

この日は、八十六代後深河天皇の御代、貞應元年二月十六日でありました。

この善日磨こそ、後に、お釋迦様の教と、日本の國のために、置いて下さつた、日蓮聖人でありました。

善日磨は、大きくなるに従つて、他の子供達よりも、利口で、情け深く、そして、親孝行でありました。又、誰も教へないのに、佛様や、神様をも敬ひます。

坊さんになりたいたと、父母にお願ひしました。お父さんも、ふだんから、善日磨を坊さんにして、世の中の爲になるやうな、立派な人にしたいたと、思つて居つたのでありますから、早速程近い清澄寺の道善房と云ふ偉い坊さんに、お願ひ致しました。

道善房は毎日、色々な事を教へますと、直ぐに、覚えませすのには、本當に驚いてしまひました。そして、愈々、善日磨は、十六の時、望みがなつて、坊さんになり、名を、是生坊蓮長と改めました。

その後、蓮長は、なほも一生懸命に、勉強を致しました。ある時、蓮長は、お釋迦様のお説きになつた教へは、幾つにも分れてゐる事は、どうもおかしいことであると、お考へになりました。それには、學者にならなければならぬと云ふので、佛様に

「日本第一の智者とならしめ給へ」と願をかけました。そして、血を吐く程お願ひしました。それからは、段々、色々な事

が。前よりは猶更其く分るやうになりま
した。

間もなく、お師匠様にお願ひをして、今
度は諸國修行にお出かけになりました。
日本で名高いお寺のある、鎌倉、比叡山、京
都、奈良、大坂、高野山に参りまして、佛
様の教を學びました。この間十二年もかり
ました。

そして、御歳三十二の時、お釋道様のお説
きになつた、澤山のお經の中では、法華經が
一番ありがたい教へであることが、本當に真
く分つたのであります。

愈々、この法華經を、世の中の人々に、弘
めやうと、御決心遊ばされまして、先づ、日
本をお聞き遊ばされた。天照大神様をお
祭りしてある、伊勢大神宮に御参詣をして
正しい法華の教を弘めると云ふ御決心を申
し上げて、それから、小湊にお歸りになりま
した。

久し振りに清澄にお歸りになつた蓮長

變らず、惡口を云つたり、又は、石や瓦を投
げつける者は、日に日に多くなりまして、然
し、中には、法華經の教を聞いて、弟子や、
信者になる者もありました。

その頃、大地震があつたり、大風があつ
たり、悪い病氣が流行りますので、日蓮聖人
は、立正安國論といふ本を書いて、文應元
年七月十六日、鎌倉幕府に申し上げました。こ
の本は、

「日本の人が若法華經を信じないならば、
國に色々な大難が起つて、日本の國は亡び
てしまふ」

と云ふ事が書いてあります。この立正安
國論を讀んだ、幕府の北條執權やその他の
役人、これを聞いた悪い坊さん、悪い人達
は、益々、

「日蓮はけしからぬ奴」と云ふので憎みま
した。

到々、安國論を差上げた日より、四十
日ばかり過ぎた、八月二十七日の夜、數へき

は、建長五年四月二十八日の、東の空の白む
頃から海上遙かに、旭日の上るを見て、手
を合せ

『南無妙法蓮華經』 南無妙法蓮華經
と聲高らかにお唱へになりました。これが
日蓮聖人のお題目をお唱へ遊ばされたはじ
めでありました。

そして、この日夕に清澄寺で、お説教を
遊ばされました。

『法華經は、お釋道様のお説きになつた、
澤山のお經の中で、一番ありがたい教であつ
て、この法華經を信すれば、立派な人にもな
り、又、やがては佛様の位にまでも上るこ
とが出来ますが、若し、法華經を信じないで、
外の教を信じたならば、地獄におちたり、惡
魔になつたり、國を亡ぼしたり、國の賊にな
るのである』

と水の流るゝやうなお説きになりました
さあ、これを聞いた人達は、驚いて騒ぎ出
しました。中にも、清澄寺の一番大切な樓

れない程の多くの惡者共が、『日蓮を燒き殺
せ』と口々に叫びながら、松葉ヶ谷のお堂に
押しかまて、八方から火をつけ焼いてしまひ
ました。

幸に、聖人は、この災難を逃れて、一時、
下總の方にお立寄り遊ばされました。

再び松葉ヶ谷には、お堂が崩れ上りまし
たから、下總からお歸りになつて、又一層法
華經のために、お盡しになるので、幕府は、
弘長元年五月十二日、日蓮聖人を、伊豆
の伊東へ配流しました。が、聖人を乗せた
船が、伊東の海に、強岩といふ所に來たとき
聖人を、強岩の上に、一人残して、船は去つ
てしまひました。今にも、大きな波が一つや
つてくれば、聖人は、波にさらわれてしまは
ねばなりません。それは、伊東へ流すと云ふ
のは、表面向きで、實は、

この恐ろしい強岩で、聖人を殺すつ
りであつたのでせう。ところが、お釋道様の
お助けでありませうか、漁士の彌三郎といふ

ものが、この時、
海へ海に出て居て、聖人を見つけたもの
ですから、それで、聖人を船に乗せて、自分
の家に助け入れて隠しました。

家の、東條左衛門景信と云ふ侍は、大いに
怒つて、刀に手をかけ、蓮長を切り殺さうと
しましたが、この時、道善、景信をなだ
めましたので、その場はおさまりましたが、
これがもとで、後に、日蓮聖人は、小松原の
大難に遭ふことになりました。

お師匠様の遺善房は、蓮長の今日
のお説教を聞いて、心の内では感心しまし
たが、表面向き、この儘お寺に置くことが出来
なくなりましたから、お寺から出してしまひ
ました。

それから、蓮長は、小湊に参つて、お父様
やお母様を、法華經の信者に遊ばしました。
その時から、自ら『日蓮』と名乗ること
にしました。

それから、日蓮聖人は鎌倉に行き、こゝ
で法華經を弘めやうと御決心遊ばされて、
松葉ヶ谷に小さなお堂を建てました。そして、
毎日、鎌倉の大町小町の辻に立つて、法華
經のありがたい事を説きになりました。が、相

いますと、不思議やお母様は、息を吹き返へよれました。

そして、佛様のお慈悲と、法華經の限りない功德と、日蓮聖人の孝行の誠心とに依つて、

お母様は、その上、四年も生き延びたといふことであります。ところが、又も災難が起りました。

文永元年十一月十一日、天津の城主工藤左近衛吉隆といふ方が、聖人が、小湊にお歸りになつたことを聞いて、大變に喜んでお招きなされたので、聖人も、心好くお許しになり、早速お出かけになりました。

それを聞いた老條景信は、「先年の恨みを晴すはこの時である」と、あまたの侍を集めて、

小松原に待伏致しました。そうとは少しも知らぬ日蓮聖人は、弟子や信者を十数人つれて小松原に差しかると、忽ち、松の樹蔭かりラツと味の聲と共に、矢をいかけます、

そし、て太刀を抜いて攻めよりました。弟子や信者は、聖人をおかばひながら防ぎまじりましたが、敵は大勢で、味方は少ないのでありまうから、とてもかないません。

馬にまたがった景信は進み来り、勢ひ鋭く切りつけました。聖人は、球數で受け止めたが、球數はきつて、太刀先は動かさず、三寸の傷をひきました。再び、景信は、太刀を振り上げた時、報せに驚いて馳けつた工藤吉隆が、切りこんで、腕のへんに斬りつけたので、景信は馬より落ちました。敵は、飛んで来て、吉隆をかこんで、四方より切つて掛りましたが、吉隆が勇氣を振ひ起して、取

ふので、敵は、かなはないと思つて、チヤウ／＼バラ／＼に逃げ失せましたが、吉隆も數ヶ所の深傷のなめに討死を致しました。

あ、これは工藤吉隆は、法華經の爲に命を捧げ、小松原の露と消えましたが、それがため、日蓮聖人は、危く大難を逃れることが出来ました。景信は、その夜、傷口がうんで、

苦しんで死んでしまひました。

その頃、蒙古の國王、忽必烈から「日本は、蒙古の家来になれ、若し、この命令に背むくならば、大兵を向け、日本を征服せよ」と云つて使が来ました。さあ、大變な事が起つたと云つて、幕府をはじめ、日本では大騒ぎであります。去年、聖人が、幕府をお諫めに遊ばした、立正安國論に書いてある事は、當つて居ります。そこで、聖人は、捨て、置けば、日本が亡びてしまふと無心配になつて、幕府の執權北條時宗をはじめ、その他、寺々に

「この大難を救ふ道は、法華經を信するより外にない」と云ふ意味のお手紙を送りました。

そ、それでなくとも、常に人々から恩しみをうけてをる聖人でありましたから、かへつて、このために、恩しみが加はりました。遂に、幕府は、聖人のお心を調へることもなく、「幕

府をないがしろにし、人々をまどはず罪」と云ふので、日蓮聖人を斬罪と云つて、首を切る事に極めました。

文永八年九月十二日、聖人は召掛りになりました。そして、衣の上より荒縄でしぼり、探馬に乗せて、鎌倉中を引越した後、真夜中に、名も恐ろしい籠の口の刑場に引き据られました。

圓の外には、弟子や信者が、これが此世のお別れかと思ひ、苦涙をのんで、口々に南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱へてをります。

愈々、聖人の首を切らうとして、役人が太刀を抜き、今にも切りつけやうとする時、俄かに、天氣は變り、大風、大雨となり、雷は鳴り響き、その上、キラ／＼する怪しい大きな光物が利場の上に飛び来りました。太刀は、鈍元から三つに折れてしまひました。守つてたつた武士達は、皆、恐ろしいので逃げ出してしまひました。どうしても、日蓮聖人

を切る事は出来ませんので、こんどは、佐渡ヶ島へ島流しにすることにまた極めました。その年の十月、聖人は佐渡の塚原といふ處に流されました。そこは、死人を棄てる處で、荒れた墓場でありました。そこには、一間四面の小さなお堂があります。屋根は破れ、軒はかたむき、壁はくづれ、床はあつても、上に登るも敷いてありません。佐渡は冬になれば、大風、大雪の日が多いのであります。風は、そのお堂の中を吹き通します。雪は、そのお堂の中にもります。そのやうに荒れたお堂に、日蓮聖人は、永い月日を、着る物もなく、食へる物もなくして、お暮しになりました。

また、佐渡の人も、聖人を憎んでをりますから、いつ殺されるかも知れなかつたのであります。こゝんなに恐ろしい日をお送り遊ばされましたが、毎も聖人は、お釋迦様の無慈悲のありがたいことは、嬉し泣きを遊ばして

とお諫めになりましたが、どうしても、幕府は聽きいれませんでした。聖人は、「もうこれまで」とお思召して、遂に、甲斐の岡身延山にお隠れになりました。そして、日本の國の爲にお祈りしたり、又、後の世の爲に本をお書になつたり、亡き父母師匠の爲にお祈りをして、九年と云ふ永い月日を、この身延山にお送り遊ばしました。

りまして、
「大きなつらら、京都に、この法華經の御教を弘むるやう」
にと調を撫で、しみよくと言ひふくめました。

そして、多くの弟子信者の唱へる雨無妙法蓮華經の聲のうちに、日蓮聖人は、眼るやうに御入滅遊ばしました。

時は、九十一代 後宇多天皇の御代、弘安五年十月十三日、聖人御年六十一でありました。

大正十一年十月十三日には、今上天皇陛下より日蓮聖人の御徳をおほめ遊ばして、立正大師の御名を賜りました。

實に、聖人は、日本の歴史のなかでも、光をはなつ、まことに、お偉い御方でありました。

また、經一廣は、大きくなつて、日蓮聖人の御遺言どほりに、京都に参つて、盛に法華經を弘めました。

各地教信

八月京都活動史

暑熱の中に大獅子吼

△一日夜本山に於て國壽會修行後講演「迷信を排す」有田宏道師「御書講義」原田日勇師
△九日及十一日夜京都市内要路に於て道路布教をなす新葉勇三次郎、山崎、板倉無二男、蘇原日道、原田日勇の各氏出席熱辯を振ふ、
△十九日本山に於て益施儀鬼會修行後説教、
「多心の失敗」原田日勇師△廿二日久遠寺施儀鬼會法要修行後説教「滅と不滅」原田日勇師
△廿一日夜本山境内に於て大納涼講演會「佛教文化の特長(續)」有田宏道師「三種の教相(續)」蘇原日道師△廿二日同様「世界の統一は佛教統一にあり(續)」土持真達師「日蓮上人の主眼(續)」原田日道師△廿三日同様「現代の病弊と信仰(續)」豊田通泰師「日蓮上人の主眼(續)」原田日勇師△廿四日同様中原孝治氏「三種の教相(續)」蘇原日道師△廿五日

ます、どうぞ、一生懸命に勉強なして、偉い人となり、さうして、日本の國のため、また、佛様の御教へのために、働いて下さるやう御願ひを致します。(なほり)

(兒童の爲に作つた日蓮上人傳であ)ります。諸氏の御批評を願ひます。

大僧正 本多日生師著 一切の勝利は人格にあり

【第三十五版】發行

發行

名古屋放送局の講演
名古屋市東區田代町城山
統一編輯局
振替名古屋一〇八一九

一部 金五錢
十部 金三十五錢
百部 金參圓
送料金貳錢
送料共

夜同様板倉無二男氏「日蓮上人の主眼(續)」
原田日勇師△廿六日夜同様「釋尊出世の本體(續)」金光孝碩師「三種の教相(續)」蘇原日道師△廿七日夜同様「入信の動機」龜井廣三郎氏「現代世相の岐路に立ちて(續)」今井乾章師「日蓮上人の主眼(續)」原田日勇師△廿八日開山會嚴修後講演「婦人の活動」有田宏道師。

本多大僧正講演會

名古屋教化會館で

本多大僧正講演會は九月廿二日午後七時から、名古屋市中區新榮町教化會館に於て統一國支部主催で開催せられ清水一乘師先づ立つて「信仰と實生活」と題し熱辯を奮ひ擧いで大僧正は「佛教と其使命」の題下で濁々二時四十分互つて大獅子吼折衝大僧正三ヶ月目の來名を大いに期待して入場した一千餘名の聴衆に多大の感激を興へて盛會裡に十時散會した。

婦人の讀者へ 本多日生現下は雜誌婦女界秋季特輯「新時代の婦人教養」に「時新時代の婦人の修養」と題して、新時代に處すべき婦人の使命と覚悟とを直截簡明に説いて猛省を促して大天來の妙調話を執筆せられたりから、婦人の讀者へ御参考までに、ここに紹介しました。愛讀したい方は、どうか同誌に依られたい。

△妙教婦人會例會 名古屋妙教婦人會九月例會は八日午後七時より教化會館婦人會室に於て開催せられ、三谷布教師の懇篤な法話の後醫學博士石田誠氏の「小兒の結核に就いて」といふ題で家庭通俗醫學から小兒の結核に關して發病、病狀、療法等精神上の立場及び醫學上の立場から様々講述せられ多大の裨益を受けて盛會裡に同九時散會した。

△教化會館コドモ會 教化會館第一回コドモ會を二日午前九時から開催、新愛知新聞社、名古屋新聞社、名古屋毎日新聞社の童話記者である、松永亮逸、鈴木夢平、平井湖湖の三氏何れも有益な童話を講演し、その他優秀なる外國音楽をビクター蓄音器に依つて聴かしめ、來會五百の少年少女を大いに精神的に感んで同日正午盛大裡に散會した。

△溼津教報 (八葉巻) △八月一日下野本壽寺にて講演例會「信仰問題所感」鶴澤純真師「特に七星法華信徒の自覺を促す」星野布教師△八月廿四日神崎真淨寺にて「自我偏に顯れたる本佛の意識信仰に就て」星野布教師。

△本壽寺夏期講習會 八月二十六日より

リ三十日に至る五日間に互り下野本寺に於て第二回青年夏季講習を開催し星野純義師主として左の科目を擔當せられ熱心に青年指導に努められつゝあり、

一、修養講座、二、歴史講座、三、文章講座、四、宗教講座、獨科外講座として鶴澤講師の農村問題に關する講話ありき。

△**奉行寺震災法要並講演會** 九月一日午後一時より洞井戸奉行寺にて題目講演會の追悼會を催し、夜間は下野本寺にて紀念講演會開催。「精神復興の第一義」笠原信真師「國民生活の改善」星野純義師。

△**金澤教報** 八月四日日本長寺に於て「正統佛教の教旨(其二)」能仁一十師△十二日立正寺に於て「芝題の真意義」杉田常政師「佛教とは何ぞや」能仁一十師△十四日日本長寺に於て「正統佛教の教旨(其三)」能仁一十師△十五日日本長寺に於て「露西亞の現状」笠川君「科學と宗教」中野少佐「日蓮上人の昔」柴野醫師「本化教徒の使命」芝沼謙城師△八日釜屋本城寺に於て「法界遊行」寺島常誓師△十六日釜屋本城寺に於て「信仰生活の意義」芝沼謙城師「法界供養」能仁一十師△二十四日

本長寺に於て「三世金物」能仁一十師△二十九日本多町河合氏宅に家庭講演「主婦への教」能仁一十師。

△**北陸夏期講習會** 八月二十六日から二十八日迄三日間本法華宗々務廳及第十布教區主催の講習會を金澤本長寺に開く、中川文學士の「佛の教」と題する正統佛教の原理論に就て有益なる講述があつた夜は中川日史師を中心として教區の布教師諸氏の宗教宣傳を試みた、「開會の辭」司會者代表能仁一十師、國と法「藤管亭」生命の寶塔を凝めて「芝沼謙城師」人の性は善なり「杉田常政師」この信念を養へ「中山事信師」宗旨は動く「寺島常誓師」生活の岐路に立ちて「能仁一十師」閉會の辭「司會者代表松井會場師、毎夜聽衆三百名近來になき盛會だつた。

九月十二日管長井村日成現下東北北海道御遊の途次、梨郷本覺寺に御來錫、本覺寺住職日暮芝靜師と同寺惣代人二人赤湯迄お出迎申上げ自動車にて午後二時同時御着。八時より

井村管長講演

梨郷本覺寺で

「開會の辭」日暮芝靜師「立正大師」草切布教師「佛の教」管長現下。來會者約百十名。同二三日午前八時より「挨拶」日暮芝靜師「人の一代」草切布教師「都會と農村」管長現下「閉會の辭」村田義本師。尙當時は梨郷尋常高等小學校長松田文次郎氏外高等科受持教員は兒童を引率して來會せられ、未曾有の盛會、閉會後本堂前にて紀念撮影し午前十時四十分梨郷縣發北海道に向はれた。

本多現下放送

名古屋放送局で

本多大體正九月廿二日の教化會館に於て大講演會に來名せらるるを機として隨ての放送局の切望に依り同日午後七時五分から同局へ向ひマイクロホンの前に立つて「理想の文化と佛教」と題し約四十五分熱烈なる大理想を説きせられ五萬餘の聽取者に多大の感激を與へた。

教信募集

各地の教信をどん／＼御知らせ下さい。そして教團相互の刺戟ともなり。又個人の情報ともして頂きたい。

社寺建築 及臺灣檜材の安價提供

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候

追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不十分なる檜材は于割狂ひ等の缺點多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地

(明治神宮外苑内日本青年館前)

社 寺 工 務 所

神奈川縣 鶴見町 (電話青山六〇二八番)

社寺工務所鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原

社寺工務所福岡支所 (電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社寺工務所大阪支所 (電話西三三二四番)

檜材の特長

- 一、耐久防腐
- 二、蟻害絶無
- 三、香氣清楚
- 四、木質堅緻
- 五、理整松木
- 六、木高輝色

統一 定價		統一 料告	
一冊	金貳拾錢	表紙一頁	金貳拾錢
半冊	金壹圓貳拾錢	中一頁	金拾錢
一ヶ月	金貳圓貳拾錢	四分一頁	金九錢
半年	金貳圓貳拾錢	一頁	金五圓
一年	金貳圓貳拾錢	一頁	金五圓
送料共	送料共	前	前
送料共	送料共	之	之
送料共	送料共	事	事

大正十五年 九月三十日印刷 納本 (第三百七十九號)

編輯所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
 發行所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
 印刷所 名古屋市中區千種町字五反田五二番地
 印刷所 三益社

編輯所 名古屋市中區代田町字城山七十七番地
 發行所 統一發行所 編輯局
 電話東京五一〇七一番
 電話名古屋一〇八一九番



目 次

理想の文化と佛教……………	大僧正……………	本 多 日 生
聖訓摘要……………	……………	本 多 日 生
佛教より觀たる日本思想の一考察……………	……………	田 久 保 本 誓
佛教讀本を讀む……………	……………	迂 學 堂 昂 生
各地教信……………	……………	編 輯 局

第三十一年十一月號